

章 環境パフォーマンス指標による評価

環境パフォーマンス指標による評価の例として、次の方法があります。

1．時系列による評価

事業者の環境パフォーマンスは、一時点の状況のみで評価するのではなく、過去からの改善状況等の経年変化を比較評価することも必要です。このため、環境パフォーマンス指標は、単年度の値ではなく、過去からの時系列の値を示すことが必要です。その際、絶対値の変化を示すことが適当ですが、景気の変動や外部委託事業の増減等の影響を受けないように、後述の経営指標と関連づけた値の変化を示すことも適当です。また、境界（バウンダリー）の変更、表記単位の変更などを行った際には、その旨を明確にすることが必要です。

事業者の将来の環境パフォーマンスを予測するためには、今後の取組に関するプログラムの存在及び内容が参考となります。このため、環境パフォーマンス指標については、将来に関する計画や見通しを示し、将来目標と現状との比較評価をすることも重要です。

あわせて、環境負荷に直結する指標のみならず、目標を達成するための環境マネジメントの状況に関する指標（この場合、定性的な記述も含む。）を示すことも重要です。

2．ベースラインによる評価

時系列での評価とは別に、環境負荷低減対策を講じた結果としての環境負荷と、仮に対策を講じなかった場合に想定される環境負荷（ベースライン）との差を算出して評価する方法もあります。これは、特に、環境保全に資する特定の製品・サービスの開発・導入や、特定の事業・プロジェクトの実施等の個々の対策の成果を評価するに当たっては有効なものと考えられます。

ただし、このベースラインとの比較評価は、設定方法に大きく左右され、恣意的なものに陥るおそれがあるため、その設定方法を明確にしておくことが必要です。